第 7 回家庭教育セミナー
「親子関係を見つめなおす–胎内記憶を手掛かりに」

宗教学・哲学の専門の徳田幸雄先生を迎えてトークネットホール仙台において行われた。参加者は 30 人弱。概略は以下の通りです。

“学問としての宗教学は、神や霊といった存在の証明には立ち入らない。それらは証明も否定もできないので、その真偽については判断停止して、それらが人間にとってどのような意味を持つのかを追究するのがその学問的見地である。本セミナーではこの見地から胎内記憶とその意味を問い直してみたい。

プラトンによれば、人間の魂は元々イデア界にいた天使のような存在であって、その記憶は誕生とともに失われてしまうという。この忘却された真・善・美のイデアの知識を想い起すことが人生そして教育の目的だとされる。このプラトンの想起説は、胎内記憶に構造的によく似ている。その意味で胎内記憶は、今になって急に持ち出された話ではなく、昔から注目されていた事柄と言っていいのかもしれない。

胎内記憶には 3 種類あって、過去生記憶（前世の記憶）・中間生記憶（生まれる前に天にいた記憶）・胎内／誕生時記憶（母胎の中で記憶や誕生時の記憶）がある。日本では産婦人科医の池川明氏が中心となって、映画「かみさまとのやくそく」の上映をはじめ日本胎内記憶教育協会などによって胎内記憶の普及が積極的に図られている。

子どもたちの中には生まれる前に空の上にいてどのお母さんから生まれるか選んでこの世の中に生まれてきたと記憶している人がいる。また様々な人生の中から自分でこの人生が良いと選んで生まれてきたとも言う。波乱万丈の人生であっても自分でそれがいいと選んできたのだと考えると自分の人生観が変わってくる。子どもたちは生まれる前に神様と約束をしていて「人の役に立つように」「お母さんを喜ばせるように」と言う 2 つの使命を持って生まれてくる。お母さんは自分が子どもによって選ばれたことを知ることによってそのことを喜ぶと共に、子どもを自分の所有物のように考えるのではなく、対等な人間として見るようになり、子どもの声に耳を傾けるようになるという効果もある。子どもの使命はお母さんに色々なことを気づかせることで、子ども自体が神様からの手紙（メッセージ）なのだ。（講義の中では YouTube で生まれる前の記憶を語る子どもたちの動画が紹介されており、「胎内記憶」で検索すると視聴可能。）